弔辞

駒澤大学文学部歴史学科卒業生代表
関　恒久

葉貫磨哉先生

本日、先生と永久の別れを迎えるにあたり、多くの卒業生が御霊前に集まりました。代表して哀悼の辞を述べさせていただきます。

私が駒澤大学に在学中、少壮気悦の先生から、日本中世仏教史、演習「蔭涼軒日録」、歴史特講「中世禅宗史研究」、国史各説「五山学藝史」等の講義を受けました。

当時の講義ノートを開いてみますと、在りし日の先生の輝いた姿が目に浮かんで参ります。

先生は中世史研究会の顧問として、『吾妻鏡』の講読を指導され、合宿では脚力で踏査し、時には自炊し、夜遅くまで我々と語り合っていただいたことが走馬灯のように瞼を駆け抜けます。

学生の心をひきつける術をお持ちであった先生の許には、何時も学生の姿がありました。それは、先生に人情味豊かな心があったからと思います。

そうした豊かな心の一つとして、即興の漢詩を作られたり、学生達のことを歌にしておられました。

『中世史研究会の歌』もその一つで、一生懸命学んだ会員の名前が織り込まれています。

そこに先生の教え子に対する教育者としての愛情がひしひしと感じられます。

葉貫先生、想い出はいくら語っても尽せるものではありません。

私どもは、先生から受けた薫陶を胸に抱き生涯の糧として生かして行くことが、先生の御恩に報いるべくものと思っています。

龍騰庵主　葉貫磨哉先生　どうか安らかにお眠り下さい。

平成十二年十一月七日